不甲斐軍記 二編

六

2258
18

門へ遠13
號2258
卷18

池清

續常山紀譚二編卷之六

目錄

長篠合戰之事
長名川合戰之事
其二
戸屋因幡・松尾八郎討死之事
庵主堂式部卿戰之事
長尾景討死之事
長尾平六郎信景討死之事

378

甲越

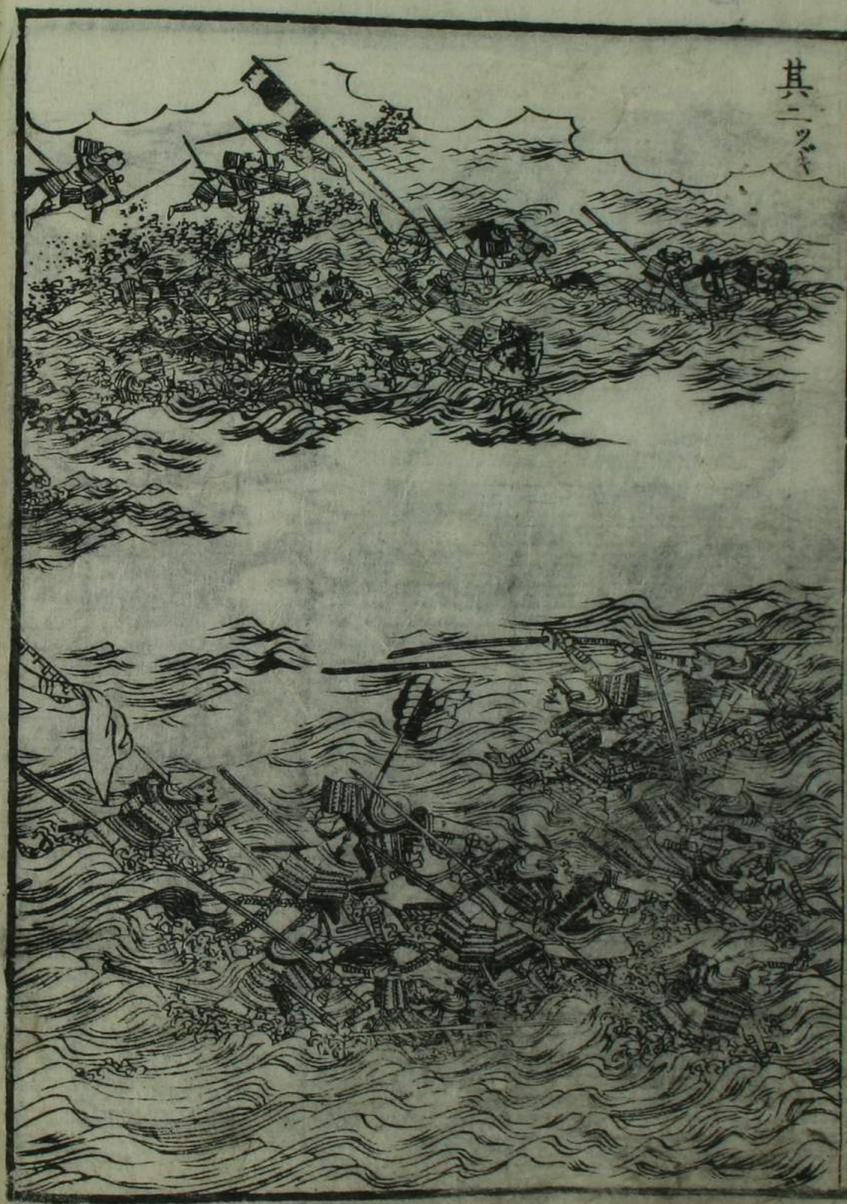
繪本甲越軍記二編卷之六

椽尾合戰の事

去程に長尾平六郎景信泉守今津伊豆守は椽尾の勢の加りるを聞き方より討ん出んと猶も軍勢を集るに中郎ろ軍勢景に加はりしかば大に威を益し再び攻寄べし軍勢を二手に分ち一手は長尾景大膳を頭り七千餘騎は糸魚川左衛門尉の内なる五十嵐小文四郎孫次左衛門座王堂式部丞を先陣に搦手には黒田和泉守国右衛門尉播磨尾八郎云清佐渡守助丞六千餘騎長余中郎の軍兵を率へ殺向す椽尾には奥を防んと大手には大将に長尾陣正左忠清京兆と云ふ大然備ふる所なり之に従ひ長尾景家ら勢を防ぐを尾

379
中越

甲越
380



381 甲越

喜平二景虎此時捨置難く人数を率り本庄美作守実乃
兵騒(?)河ゐるを先手として黒田が勢を防ぐ時に天文十二年正月
廿三日栃尾にむかひける黒田和泉守や八戸屋(?)佐貫松尾等を始め大中
弥の諸将を率ひ其勢六千余騎旗の手を打靡せ蔵王堂の前に
金鼓を拍ち聲を励め只一戦に打挫げし操に操く雑兵の負(?)は門(?)
を渋らんとするを見るより本庄美作守宗佐(?)兵を操
安居を一戦に安(?)せんとし己に勢を操出さんとし此時景虎は鎧寒を肌ぬ(?)
侵し寒風猶劇しけるが鎧の上に衰服を引捲ひ机の上に坐し
てゐるが本庄宗作英が雄るを制し各老功の勇士なりしも未武術に
達せざるゆゑ兵士を出す時にあらず敵の盛なるの篤を待ておべし
と勢を止めてゐし只(?)社(?)本庄宗作英衆を弁ち敵勢川を渡し

るべき新手待(?)するものなれば敵に気を附ざる内速に弓銃の者を廻し
し先勢をおさへ一戦に勝利を得べしと勧むれども景虎笑て(?)も
せず敵の形勢を努眼居たり本庄宗佐英敷(?)笑の気色を察し
景虎君は聡明世に逾たりとも未若年にて軍に馴(?)給へ(?)ね(?)
ど敵の猶勢に臆まししにや(?)と猶も勧めて軍を初めんと争ふくを(?)
景虎急を発して大に慨り氣わ(?)年るりと云今日の大ね(?)
とものならず氣が下知を背くやと怒りて疑(?)るるものならば本庄宗作
英も詮方なく拳を握りて見居たる所に實も景虎が洞の如く
寒風烈しく吹く向の勢の勇等おもや緩ん敵の旗色(?)龍(?)
く見へしかば景虎急に團扇を執り今社一戦の時なるぞ
や進めと疾風の如くに下知すれば待設たる本庄宗作英が軍

会稽の恥を雪めもあらべき歟と、実盟戸屋松尾佐貫主人り
〜会稽いまだ雪がざるを以て、陣中に用ゐべきこと、見くびる事、申に勢
実くへ入る其勇猛當り難く、一戦にも及ばず敗北、敵方大
に勇み退き、くい首を取駆立て、敵勢川へ引き〜なく
り崩れ立て、寄せ来る者百騎人戸屋周備大よりうて、白旗の
の形勢なるもの、逃〜く、実崩せと、ひらく下知すれども崩れ
立てる勢耳なれば、吾れ〜落行う松尾八郎左衛門中
にあつて是を見るより、士卒を下知〜く、敵〜急〜、すれども、先
陣の敗走を引き立てゝ、俱に崩れ〜く、引退く松尾八郎左衛門、
ら〜、殊に百騎を従へ、戸屋周備と俱に殊に、
無

無双本陣勢へ、敵〜急る佐奚勢、是を救はんと、奥〜、叫んで、敵〜
走り、右に當る方に、敗北、実周備、又、陣〜、敵〜、
今の戸屋周備、松尾八郎左衛門、を従十八人、〜〜、
生延んや〜、死賊〜、〜〜、敗北、〜〜、
も、振び戦へ、佐奚勢、是に、切〜、〜〜、
上田の加勢、栗林肥前守、〜〜、
勢を率、駆出、戸屋と、色〜、敵〜、
急る、敵、戸屋、松尾、切る、従、
力強く、敵、戸屋周備、切る、
と、〜〜、捕物、今の切〜、
郷落、強勇、駆回る、本陣、

383
甲越

強き墨門を者ー周橋と見給へ共秘術をそ
〜挑戦ひ〜へ周吳〜く見くらーゞ今井武蔵ー揚つよん貴よ
周橋を実術〜く首を捲く松尾八彦三清いふ揚威ーの猛と云ふ指
物にへ浪のまり月潮さるを門風よ舞ー大方まるよりどし雍揮へ切揮
ひ敵十二騎まぐ切く落ー勇よ勇んぐ弾へ面上国勢の中ろ
墨野七三郎〜名乗ろ大方力を打振く松尾に討〜負ろ手よ金剛
力を出ー喚さ叫んぐ切結ぶ墨野力已よ弱ろけと武周よ一斗を回ろ
〜偽ろ負く馬を反ー敵くよ走ろ今まで松尾大ると揚黒ろ〜反
ぜ〜思ろて追負る透を見くく墨野七三郎電光の如く大方力城
振ろ馬を反ー〜切く負よ過とず松尾ぶたの馬を下ど切と
尾矢猫に思へくも帰へぐ〜高ろ中よ落る石を走ろ寄て肩

三郎を見〜く門徒の墨周勢一戦すも及ばず崩まとろち三条の城へ
敗走ば景虎勝興を揚さ世大ると合戦半ろと云ふ〜ろ振やく
く大ると方へ打く紛是ろ〜ろ長尾平六ト助を伴へ先陣に
間の内ろ五十騎小文四八条た来ろ千騎ばく騎乗ぶ千騎
大態備ろ先新た来ろ伴へ〜く入ぜ三三ー貴ろ大態ろ
軍兵ろ弾丸を振へく寄負ろ大態ぶ良徒之宅瀬平一番隊と名
乗ろ〜寄く出ぶ敵を一発ろ寄数ば見ろ〜お陣入れ迫川退き
つ桃〜弾へ大ろ平六郎武千騎ろ〜ー奥ー先陣と助て討く急ぶ
真勢ひ引ー〜ぜ〜ば大態ぶ軍勢防ぐ乗く見ぶ〜ば騎乗ぶ二陣に
振へくる長見次郎ぶ来ろ多倉内函ぶ長興と村ぶろ七郎上野源六安
国ぶ於ぶ殿ば後乗ぶ勢の中へ面も振ば切く〜大花を貴ー〜弾へろ後

二方に敵を受け途と先ッ〻く見へ〻くるを大將備景勝世子備まてこそ猛れるをとゝ士卒を勵まし樊噲が威と奮ひまこそ馬と乘出し周囲ら敵を當り真甲より切たゝけ御旗を羅三南絶に打倒し猛虎の怒るを如く敵を討夏蘇の如く足を當る者生くゆるこそなけれ實に

座王堂式部勇戰の事

去程に風間五十嵐八条篠塚政王堂森國の軍勢い大勝に乗人名倉村山上形小海の勢と一番に彷徨せんく武い討武い討まこ生死知らぬ軍に駆入ッ〻景虎が軍威破竹の如く假扶に討ると晴景勢見足に勵こまと益勇人ぐ敵へ〻備景勢物の如く討るこまと崩まく敗走ま時景勢彷徨まり疾風の如く進

甲越
386

甲越

討ち首と雖る支数部を数ず大将長尾平六郎俊氏い孤軍の間よ
わつ〳〵縦横の駆入るく羅織一切拂の完徳も麻を羅に乱し〳〵くるる
こを亦を紛ぎ〳〵く勇威と春〳〵く殊くいけ切先よ當つ〳〵金を鳴し傷
を蒙る者数知らずた存へくろと引退く大熊備前守兵りよ多つ〳〵ろ
と聞く討ち急る俊氏が迫間馬ろ寄い御馬前よ〳〵氏〳〵が付
ぬする を所後せよと云ふ勢る見て五郎左衛門尉玄蕃頭田俊綱竹
中重治右治部丸郎氏八蔵長田助之丞青木久馬石田仙二左衛門毛
屋藤右衛門古林式部丞蒲山一貫斎阪浦彦二郎助七平尾源内左
衛門等の勇士百十騎人切先を揃へ進を志ぶく大熊勢の真中へ云
釈もう〳〵刎く入當る を幸ひ斬〳〵く勝誇つる大熊勢切先を
揃へかこよ急つく討ち紛よ繰り見て羽田右衛門尉毛屋長田徳山弾正

勇士七十騎人同じ拂よ討ち紛れく俊氏旗本と叫ぶう見て再び踏み出す
むろよ討ち入る俊氏天を仰ぐ長弟一天を亡せろ天を亡ぶ
せろ今八死出之途の供よ死人の山を築さんと所作羅の如く落
ぶ〳〵く馬とうけく乗り回し東西南北よ駆回ろ俊氏の辺所大熊
勢を士卒の駆入るく片端ろ獅子一切絶し血の涙を流〳〵く殊の
ぶ〳〵大熊勢は猛威に強易一四方へ散〳〵く敗走し宇作天殊の
は絶をうろ士卒を動き〳〵馬を高〳〵大熊俊氏ぶ〳〵
高名せよやと大熊勢に対つ〳〵大将俊氏服を脱〳〵く高声
と出し龍の如く中を走る虎の如く生死知らずよ殊へ
宇作美ぶ勇士之川忠内福良豊之進五百騎指右衛門北監物田代
次郎兵衛加賀古爾佐周防左衛門垣能之弾正

始め抜八人討死し後景も今は斬箇所ありなれば形に虚しくなり
たる所へ紺糸威の具足に鹿毛の馬に跨り鑓を引くくすぐ突
佐美勢を撤らして後景を救ひ来る士あり後景是を見るに是
甘式部少輔信縄なり後景大に悦び思ひもよらぬ助を受る事生涯の恩
いかで忘るべきと云ふより通り透過千ぢの馬を引くに信縄打起
また行く聲高く息を続むるの間貴殿此所を防がるべしと云へば式部
も救刻の鉄砲に成まで打も此敵を防ぐに何の難き事や
心安く思しめすべしと云ふ手に血に染たる太刀をかいふりて
大音に呼はり我こそ式部少輔の御内に其名も高き
旨取りとて高名を心掛ける諸鐙を合せて奔くりかかる敵の中へ
人七人馬人共に打伏せ跡を追ふ一人に雑兵も追ちらし

見えさればこれ五所大身の鑓を引提げ式部目がけ突く
まさに彼大太刀まよかし合ひ二所に実に出し鑓の積
潜ると見えしが忽ち猫妻の如く胸板より八寸斗に切つ
流石の豪気も深手に屈せず大地へかばと伏しけり其
云よりいろいろ黒駒金丸清門が鑓を奪ひて式部が馬の諸足を薙伏せんとせ
おくれたる式部少輔眼を放ちて小賢しき小冠者が振舞やと馬を蹴
せ駈寄るとみえしが猿猴を延し黒駒が鐙の上帯に取付て同じく
上へ差上ると見るより金丸清門が郎黒駒雲平是を救んとて
八人馳寄るを式部少輔は打払ひしが深手に得さるべくと
左衛門をかくして但し大勢大力の式部は打まよ
同じく血を吐て死しける此勢に恐れて黒駒が従兄も肩

389

にあて引返ハ大養市郎章駄天の如く馳来り一文字に討てかゝる
式部少輔見るより忽ち見て聞て合せ打合せ上段下段と戦ひしが式部
元政の勇士なれども鎧の胸もとしも上なれバ大養が拝つく打太刀は
受損じ肩先をえぐられ切れて馬より下にどうと落るを大養飛下り
て頓て続よ首をぞ挙りける

長尾俊景討死の事

時に平六郎俊景ハ座王雲式部に敵城防がせ其身ハ小丸を囲り
よりが士卒と堡に登て旁を励ましが式部が討死をきくより今ハ猶
手へ養ひぬさらバ最期の合戦せんとて手従二十騎人雲霞の如く敵の
中へ面も振らバ無くかゝる其声ハ虎の吼るよ異ならバ家中の透間
もなく雑兵と戦へかずしるもなる勇士し宇佐美大勢も恐るゝなし

東の兎頬討死を見て然ぞ御しかずされけ宇佐美ハ猶河野軍就突よ
なきバ俊景が勇士一人も残ら討死し今ハ俊景一人四方に当つて戦ひ
しが林泉惣蔵大宗甚内藤代孫市途を接へ俊景が二十四目がけ戦ひ一
突と矩入る俊景憤声を出して拒戦ひ大手をとし林泉が甲の
真向を切割大宗が掏拍を切て落さ是を見て藤代孫市堪く
ばしく引退く宮に景虎が先手ゆまおわりし末の家高時ハ本年二十才能
敵討ち高名せんと宇佐美が手より加わり時何捕を見て途をまりく
強の者俊景同忽つく寄くる俊景太刀を電光の如く閃し鎧しが同
戦ひしが辰蔵が捨次第に乱れ今ハ危く見へたるを近く
もなく路四く駿合を捨て戦ハざるを其まゝ俊景が馬の左を後へ
さと寃へ後馬なりしも是にハいかでたまるべき一騎し征の口まで

信景馬上にたまり得ず大地へどうど落る所を透さず引組上に
のりかゝりけるが二尺ばかりすぐ抜合しが血気の辰藤左は信景を引
補首をぞ掻たりける名ある大将討死ありしかば築本の士どもが詞に
きと思ひしに討死したる八幡殿昌を始め三条勢は諏訪の士を責られが
とく逃さまにまくりて三条の陣へ逃入ける時景景虎は一戦に利を
得合戦の次第軍忠の第を記し大将信景が首を座敷の庭頭に実
賞云へ甚よろこび座敷大に悦び多く軍忠の面々へ各感状を賜りける
晴景は勢を固め本城に帰り陣んとし其用意ありし景虎兄晴景へ
諫め大将信景討死すといへども猶黒田金津あり景が勢ひ微なる中
に討て入べく勧むれども晴景耳にも入ず信景討死の上は何者か黒田金
津を助人目を憚らて勢ひ衰ゆる心定まり其時に至りて討へ安からん

今兄を討ば渠が必死を定め窮鼠却て猫を喰の謂あるべしと
景虎が諫を用ひず諸将には暇を賜ひ稍く府内へ帰陣ありし

辰蔵強盗を討事

作此辰蔵と云は越後国蒲原郡西条浦村の農民なりしが八才の
時柿を取んと木に登りしが誤て足を踏外し梁より落しが
中より身を翻へして枝に取付ぬ是より面白き事に思ひ屋根或は
高塀を飛越る事を修練して猿の術を自得し生質千斤を挙る
怪力あるに兵法を好み絵を刺し棒を使ひ其外一人の強敵あつくや
悪所の悪に横行し資財を掠め人を害することも村民恐るが怪
威に戦慄して制する事能はず一夜此辰蔵西条浦村庄官の宅に押
入て主人を捕め縛り己が顔を出すまでもなく衣類を奪ひ酒を呑肉を

391

賞人並く一村言合せ賄賂する支あり〳〵を拉て相図とし弛張
つく防ぐと約し一定あり之を聞く時は耳を塞ぎ目を覆ひ知
る者なし〳〵長義時の十七月大雨の夜盛に出て探索し来
む此時盗賊い家財衣服を奪ひ絶まず泣叫ぶ人
所々に出んとす長義遥より見て切り殺す
一声出て霹靂頭のよう落るが如く此山刀を内手に見て
〳〵うちよりて強盗の體両脇より取ひ地擦ぎ作ところ
両脇大なる岩石を抜連〳〵刻〳〵に砕く長義二人を相手〳〵勢ひ猛
の如く武へ叫ひ〳〵中男ひ人懸拒し〳〵迫んとすると長義遥
に退き〳〵遥に敵を切伏せ
此強盗のある許四若〳〵支よく収びて家に帰る

許

を離る支十町許の曳枕に一の巷を作び者に戸を開一強盗
て規音絶を続編する翁あり〳〵も此家を通りの長義
勇威を見て〳〵倩に拉き今時法国降の〳〵新参
者〳〵強勇の士を拉〳〵る壮士〳〵匿〳〵〳〵〳〵村野に異る
支を惜む長義翁を物し来え其中あり対し常国厨内の長
尾家代〳〵武を輝し〳〵切名の侍多し〳〵仕へ支を新へ孫
〳〵〳〵甚志を思さず室〳〵目を絶て〳〵へ翁殊頭で汝和殺
よ知る一言を述んと殺よ切り汝厨内に仕へ中あり宜し
呆せん去る〳〵家切り中乳の物と呼び見と試るよ保支し
支一切の拘い皆家の高あり室ハ活家の賞さる不物と則あり
室も亦別あり賞たると仕く活〳〵を初る強毫も爽び其別や狂

甲越
393

の徴なるべし神其中より出て故に地の事を教する姿の如くまたの如く色あり形あり妖祥自ら殊なる所有に馬呼の如く枯骨の如く死屍の如く壇山のおしくく敗穢の如く捧くらの如く蜘蛛の如く偃蓋の如く猶羊の形の如く羅生者の孔形の如くこれ皆人の魂魄なり故に人は人を殺すの勢ひ有て斬るべし乗するに大将関を出でしく関を出て北にうつる又遠藤尾の方より常へ青雲紫霧龍文商彩うつ果しく山下より英傑の將にうつる後日必天下を輝さん沙名を揚げ名を挙て遠藤尾にもつくうとをおそべし亦又遠藤尾の士松村勉なる者門と出こと数と一封の書を与へ云へらくべ辰藏大なる遠藤尾より出でうつ果長尾景虎の英才智謀の彷彿たる者の言の神なるを感し松村

ゞ郎よりの書を持ゞ来るを出し山失等を勧めしが此文の功よりうつ辺警の到よ加うつ後に後上野故と号け勇名を弧て

支々山書の世に見へうつ

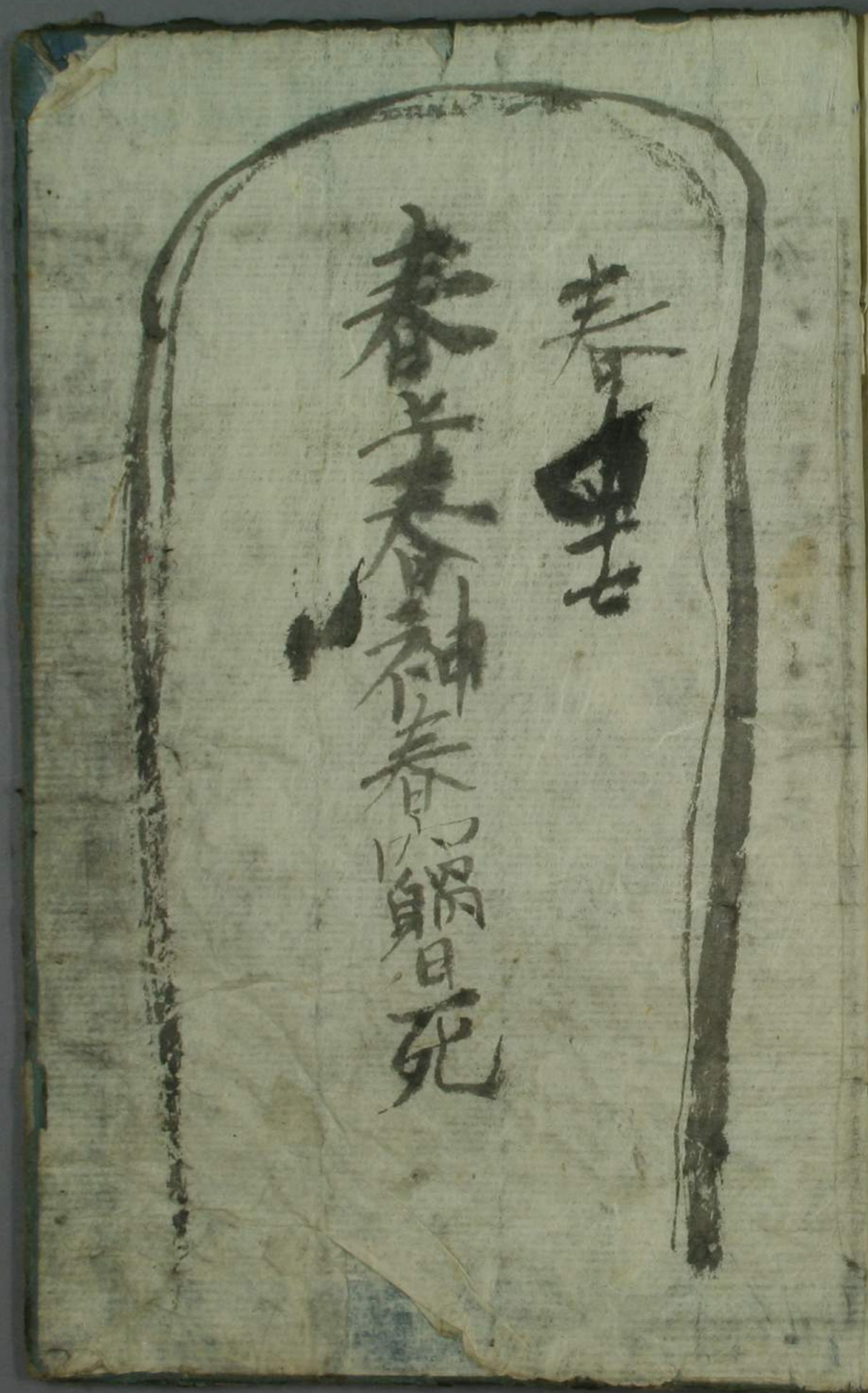
経巻 越後国より到る支

甚年四月七日京都より勅使寺大納言尚弘入道越後国内の城に下著あり屋形を始長尾一族のくく謹ゞ勅使を形る大納言度作るハ越後国ゑ机等を絵くく輟ゞ是よりくうと上親雲筆を絵ら一紙を一軸を書写ましゝ由すに光謝国静謐神祈靖のるうつ早く神社に納め奉る度ゞ勅使の名を宣ゆへ屋形兵庫助定貫長尾弾正左衛門晴景を始め一門のくくにハ古志駿河守秀景上田越前守房景結四郎左衛景之上田修理進景国竹内相模守

親椽尾佐渡守景久高梨播磨守宗景飯野右馬允景久以下
長尾ら一族宣命を承り朝恩の忝きを感じて逆孔を辞し震襟
を安じ奉る人々勅旨を受け新殿に於て勧修寺殿を賓客し奉り
定賓長尾晴景自ら囲境を護送し別に神饌献ずるを以て系幼
に答へて恩を謝し奉り種々の捧物を献ずる勅筆の仏経を腐中
の八幡宮を修理して賓殿に納め奉り代忠功を竭さる事を思
賞あるべき旨勅定賓の命ぜ奉り長尾晴景是を約する安田治
部少輔順易に姫武食津の保北両所を給ふる事先美作守慶秀
に椽尾頻宇佐美駿河守定満と堀江越後守山内を給ひ其外の法士何
きも恩賞を預り忠勤を抽んで天文十四年正月諸士剛内城に出仕系
虎も椽尾左京亮剛内城に参内し時系を称め直に入道酒肴を

美作守宇佐美駿河守の神饌献ずる先新左衛門尉大熊備前守
以見次郎左衛門以下を集め去年椽尾の一戦に長尾平六郎景
を殺害し西徒数多討取しの残党黒田和泉守今津伊豆
守野本大膳篠塚伊賀守因宗左衛門尉ら猶国中の要害を構
新り逆風を震ひ近隣を侵し諸士又集まるが催促に従ふ者多し系
未だ帰服せざる者を東禅寺補国を作る対ひ何ぞ此の事ら當国新盗
の始めなんや未だ逆意を賜る勅旨に背く事又南国の武威
を當る早く征伐の支あるべしと云々系
に奏聞を経西徒退治の策を運らしべしと神饌献ずるを再び系
上せ廣橋大納言兼秀卿を付く綸旨を形のごとく奏聞あつて
懐中納言勅を奉つり宣命を賜へ廣橋大納言殿も綸旨を

ふく書を孫ひしゝゝ晴糸一族と集り縫人くく頂戴し編旨法
帆と寫ーゝ〳〵〳〵田中ゝゝ相綱ゝ

明治

繪本甲越軍記二編卷之六終